

ザンジバル北部住民における水接触行動と住血吸虫症に関する知識

安高 雄治¹ 門司 和彦¹ MGENI ALI F.² KHAMIS ALIPO N.² 嶋田 雅暁¹長崎大学 熱帯医学研究所 熱帯感染症研究センター¹
Ministry of Health and Social Welfare, Zanzibar²

ビルハルツ住血吸虫症の感染を防ぐには、感染リスクを有する水との接触を避けることが重要である。しかし、高度流行地に暮らす住民にとって、リスク水との接触を避けることは現実には困難である場合が多い。それは、利用可能な安全水が他にない場合や、仮にあったとしても住血吸虫症に関する知識が不足、あるいは間違った理解によって自ら感染リスクを招いてしまう場合があるからである。また、炎天下での水浴びのように、感染のリスクを理解していながらリスク水と接触することも多いと考えられる。本研究では、高度流行地の住民を対象に、虫卵検査及び知識についての聞き取り調査を行い、実際の水接触行動との関連について検討を行った。

【対象と方法】 調査対象地は、タンザニア・ザンジバル北部のバンダマジ地区である。当該地区の人口は197世帯996人（男性488，女性508）であり、全体の65%に相当する648人が調査に参加した。現地では、2002年8-9月に虫卵検査を行い、10-12月に知識と水接触行動に関する聞き取り調査を行った。水接触行動の直接観察は、連続した2週間（2003/9/17-9/30）、安全水（井戸）を含めた全水場（41カ所）を一時間半の間にすべて訪れ、観察時点の水接触行動において人数・性別・水接触状況などを記録する作業を午前6時から午後6時まで1日に6回繰り返した。

【結果と考察】 全41水場において観察された水接触行動は合計1791回（男性304，女性1487）であった。このうちリスク水との接触は計104回（男性81，女性23），安全水との接触は計1687回（男性223，女性1464）であった。水接触行動そのものは安全水との接触が圧倒的に多く、また女性が多かったが、一方、感染リスクを有する水との接触は男性が多かった。リスク水との接触の内訳は、洗濯46，家畜の世話34，水浴17，水汲み7であり、洗濯（女性15/46）と水汲み（女性6/7）を除くとほとんどが男性の水接触であった。聞き取り調査では、ほぼ全員（644/647）が水浴びに安全水（井戸水）を使うと答えているが、その一方で男性の40%（123/305），女性の10%（34/342）は水溜まりや川でも水浴びをすると答えた。この傾向は洗濯においても同様であった。全体の83%の住民が水溜まりの水にリスクがあると認識していたが（リスク無し：12%，分からない15%），そのうち31%の住民はリスクを認識しながらもリスク水と接触していた。虫卵陽性率は50.3%（男性：62.6%，女性：39.4%）であり、男性で有意（ $p < 0.001$ ）に高かった。リスク水での水浴びはほとんど男性に限られるにもかかわらず女性においても4割が感染していることから、住血吸虫症感染には水浴びと洗濯の両方が関連していると考えられた。

Water contact patterns and knowledge of schistosomiasis in north Zanzibar

YUJI ATAKA

Research Center for Tropical Infectious Diseases, Inst. Trop. Med., Nagasaki Univ.,
Nagasaki, Japan